

「規準」と「基準」・‘ criterion ’ と ‘ standard ’ の 区別と和英照合

——教育評価の専門用語和訳に戸惑う

Distinction between "Norijun" and "Motojun" in Educational Jargon :
Considerations Regarding Translation as "Criterion" and "Standard"

皆見 英代*
MINAMI Hideyo

Abstract

In the context of the recent great concern about student assessment, the distinction between two key words, "*norijun*" and "*motojun*," has been a controversial issue in the Japanese education world. The present essay comments on the use of those Japanese terms, and it also considers the definitions assigned to them by Japanese researchers in various articles and the distinctions between the English words "criterion" and "standard."

Although both of these different ideographic compounds are read as "*kijun*" in ordinary Japanese, they are deliberately read in different ways in educational jargon. Each also has an alternative reading, respectively "*norijun*" and "*motojun*." The character compound also read as "*motojun*" is in more general use, while the other is used mainly as a technical term.

In spite of the fact that most Japanese experts on evaluation of educational achievement regard "*norijun*" as the Japanese counterpart of "criterion" in English and "*motojun*" as the counterpart of "standard," they have not yet reached agreement on their respective functions. As a result, academic papers usually begin with a paragraph describing the expert's individual interpretation of these ideographic compounds.

Likewise, native speakers of English do not necessarily concur on the comparison of the two English words. On the one hand, Sadler, an Australian specialist, considers in his paper how "criterion" should be distinguished from "standard," and refers to a few cases of confusion in meaning in English publications. On the other hand, Hambleton, a contributor to *The International Encyclopedia of Education*, disagrees that there is such a misunderstanding.

The writer therefore suggests that the use of the two different compounds "*norijun*" and "*motojun*" by a translator intending to draw a distinction between "criterion" and "standard" should be avoided, as the difference between the two Japanese words is small and very subtle, does not accurately express the difference between the two English words, and could lead to misunderstanding in certain situations. Rather, as there is no exact translation, the English words themselves, written in phonetical *katakana*, should be used.

* 元所員

1. はじめに

昨今、評価についての議論や実践が盛んに行われている。平成3年に出された文部省の指導要録の改訂通知より、「評価規準」の語が公式に用いられ、各学校でも評価規準作りが進められた。しかしながら、一方で都道府県教育委員会で作成した資料や市販の教育書に「評価基準」の語が用いられる場合があり、そうした状況が両者の区別と内容をめぐる議論をひき起こした。さらに、平成13年の指導要録の改訂通知、及び国立教育政策研究所教育課程研究センターのまとめた「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料」では、「評価規準」の語のみが用いられているが、実際の評価では「評価A」をどのようにして判断するのが課題とされてきた。

そうした背景の下、筆者は教育評価に関して英語で書かれた論文 (D. Royce Sadler, "The Origins and Functions of Evaluative Criteria", *Educational Theory*, Summer 1985) を和訳する機会があり、英単語 'criterion' の訳語として「規準」と「基準」のどちらがふさわしいのかを知りたいと思った。評価を専門とされている若手研究者からは、「素人が迷っても悩んでも、おかしなことではない」との励ましをいただいた。そこで、なぜ混乱を招いているのかについて調べ始めたのである。

日本語一般では、「基準」という表記が大勢を占めているように見受けられる。というのも、新聞誌上で「きじゅん (規準)」は「基準」に「常用漢字で二様以上の表記が慣用されている語の一方を統一的に使う」(『読売新聞用字用語の手引き』2005年2月、中央公論新社。『改訂新版 朝日新聞の用語の手引き』2007年11月、朝日新聞社) ことからあきらかであろう。日本の教育評価専門研究者の間では、'criterion' に「規準」を、'standard' に「基準」を充て、教育界ではそれぞれ「のりじゅん」「もとじゅん」と読んで区別している。ところが、英語の 'criterion' と 'standard' には交錯説があり、またそれは、誤解にすぎないという見解もあることが分かった。

そもそも、文法・語彙等を考慮に入れた語法 (usage) の視点からなめると、日本語と英語との間には完全に重なる対応語はおそらく見いだせない。まして対の英語の微妙なニュアンスの違いを漢字に置き換えて表そうとするなら、慎重な選択が必要とされるはずであろう。この小論では、まず「国語辞典」「英英辞典」で一般的な使い分けを探り、「教育評価」に関する「事典」を参照して専門用語としての解釈や定義を学ぼうと努めた。また、専門研究者による論文も参考にさせていただいた。管見にすぎないが、参照した資料をとりまとめておく。

2. 「規準」と「基準」との使い分け - 「国語辞典」に学ぶ

まず、『広辞苑』を参照してみる(『広辞苑第六版』2008年1月、岩波書店)。

【基準】ものごとの基礎となる標準。比較して考えるためのよりどころ。「**規**」を設ける。「**準**」を上まわる出来。「**建築**」。

【規準】(「**規**」はコンパス、「**準**」は水準器の意) 規範・標準とするもの。 [哲] (criterion) 信仰・思惟・評価・行為などの則るべき手本・規則。規範。

他の国語辞典もこれに準じているようである。例えば、『旺文社国語辞典』では「使い分け」が明記されている(『旺文社国語辞典第十版』2005年10月)。

【基準】物事を比べるときのよりどころになる標準。

【規準】(「**規**」はコンパス、「**準**」は傾斜を測る水準器の意) 社会において従うべき規則・標

準。

使い分け「基準・規準」

「基準」は、物事を他と比べる時の基礎となる標準の意で、「許可の基準」「免許の基準」「労働基準法」「賃金の基準」「建築基準にのっとる」などと使われる。

「規準」は、物事の規範や手本となる標準の意で、「道徳の規準」「審査規準」「公示価格を規準とする」などと使われる。

『新明解国語辞典』でも趣旨は変わらない(『新明解国語辞典第六版』2005年1月、三省堂)。

【基準】何かを比べる時によりどころになる、一定のもの。最低それだけは満たされていなければならないとされる決まり。

【規準】それによって行動することが社会的に求められるよりどころ。

類語辞典も、参考となる(『早引き類語連想辞典』2004年7月、ぎょうせい)。

【基準】規格。基礎。基本。尺度。条件。寸法。のり(法・則)。標準。スタンダード。パロメーター。

【規準】規則。規定。規範。規律。法則。

さらに、法令用語としての使い分けに関して説明を確認してみた(『法令用語事典』学陽書房)。

規準 規範となる標準ということで、基準の語と大差はないが、「規準」の語は、規範性のニュアンスを多少とも強く出そうとする場合に用いられるものといえよう。

基準 (許可、免許等の)ある事柄を判断するための尺度となるものをいうが、近時の法令においては、行政機関が、免許、許可、認可等の行政処分を行う場合に、そのよるべき基準を法定した例が多い。

端的にいうと、「規準」には、「模範・手本とすべきもの」といった意味合いがあり、「基準」には「比較をするための標準」と「最低限満たされていなければならない条件」といった主にふたつの意味がある。しかし前述したように、一般的には「基準」に統一され、厳密な使い分けはされていない。

3. 英単語‘ standard ’と‘ criterion ’の異同と交錯 - 「英英辞典」を参照する

英英辞典を繙くと、「standard」は、「criterion」より多様な意味で用いられることが分かる(*Colins COBUILD English Dictionary*)。

crit^{erion}/crit^{eria} A criterion is a factor on which you judge or decide something. (「クライテリオン」とは、何かを判断したり、決めたりする場合によりどころとする要因である。)

stand^{ard}/stand^{ards}

1 A standard is a level of quality or achievement, especially a level that is thought to be acceptable. (「スタンダード」とは、質あるいは成果の水準であり、とりわけ容認できると思われる水準を指す。)

2 A standard is something that you use in order to judge the quality of something else. (「スタンダード」とは、何か他のものの質を判定するために用いるものである。)

3 Standards are moral principles which affect people's attitudes and behaviour.

(「スタンダード」とは、人々の態度や行動に影響をもたらす道徳的な規範である。)

4 You use standard to describe things which are usual and normal. (ごく普通に正常なものごとを描写するときに、「スタンダード」を用いる。)

5 A standard work or text on a particular subject is one that is widely read and often recommended. (ある題材に的をしばって書かれた業績あるいは教本のうち「スタンダード」と称されるのは、広く好んで読まれ、頻繁に推薦されるものをいう。)

次に、類語辞典にも当たってみたが判然としない (*Longman Lexicon of Contemporary English*).

standard [countable] a principle or condition, often in judging, measuring, etc, by which various things can be judged. (多くの場合判断や測定における原則や条件。それにより様々なものごとが判断できる。)

criterion [countable] a standard by which one can judge something (何かを判断できるスタンダード)

オーストラリアの教育評価専門研究者サドラーが、論文のなかで両者の区別 (*Criteria and Standards Distinguished*) について述べている (D. Royce Sadler, "Specifying and Promulgating Achievement Standards", *Oxford Review of Education*, Vol.13, No.2, 1987, pp.194-195.)。「一般的な総合辞典」の説明を踏まえての指摘なので、ここに引用しておく (筆者訳、以下同)。

一般的な総合辞典では、「criterion」にも、「standard」にも、多様な語意を認めている。(本論文において)これから議論を展開していく際に、様々な論点をめぐり二つの言葉の区別が重要となるところから、以下のように定義しておく。

criterion そのもの固有の資質、特徴。それをもとにして、質の鑑定や評価を下したり、決断や分類を行うことができる(「判定の手段・方法」を意味するギリシャ語「kriterion」より派生)。

standard 卓越性や達成度の所定の水準。あるいは、規定の努力目標への到達や、目的に対して適格な尺度に照らし合わせてみたときの、所定の品質。権威筋、慣行、世論によって樹立されている(「伸ばす」を意味するラテン語「to extend」より派生)。

上記の定義は、「オックスフォード辞典」に掲載されている二語の解釈に倣ったため、それにきわめて近いものとなっている。ただし、当面の目的に沿うように若干言葉遣いを修正した。こうした「criterion」と「standard」との区別は、広く一般に意識されているわけではないが、教育評価に関する文献では、時折みられる。実は、グラスが教育測定において「criterion」という言葉がどのような意味で用いられてきたかについて、その変遷をたどっている (Glass 1978)。当初、「criterion」は、成果の特徴 (characteristic) や次元・領域 (dimension) に関する用語であった。ところが、グレイサー (Glaser 1963) の時代あたりから、能力や学習到達度について判定を分ける特定値を意味するようになった。つまり、「criterion-referenced testing」における「criterion」は一貫して数量化された尺度上の境界 (cut-off) とみられる。それゆえ、上記の定義に従えば、「standard」と呼ぶ方がふさわしいであろう。

とはいえ、文脈から意味が明白となり混乱は生じないことから、話し言葉や文章において「criterion」と「standard」とは、どちらを用いてもさし支えないことがよくある。たとえば、要件として問われた特質をとにかく具えているといった趣旨で、評価対象は「criterion」を満たしている」という言い方をすることがある。この場合、前述の考え方で「criteria」と「standard」との識別を意識すれば、「standard」を満たしている」という方が正確である

う。それでも、「高品質の」という意味で、‘ of a high standard ’とは言うが、‘ of a high criterion ’という表現は正用法と認められない。

‘ criterion ’と呼ばれているものが、資質 (property) や特徴 (characteristic) について述べているのか、適格と認定できる最低水準 (level) を指しているのかは、時には品詞によって左右されることもありうる。名詞の ‘ consistency ’ (一貫性) は、明らかに資質に言及しているのに対し、形容詞の ‘ consistent ’ (一貫性のある) は、評価対象に適用された場合に資格認定の境界 (すなわち ‘ standard ’) の想定を感じさせる。そのような境界は明言されないものであるが、その存在は話し手と聞き手の双方で暗黙のうちに前提とされている。確かに、形容詞や形容動詞はほぼ例外なく適格認定の境界を憶測 (暗に示唆) させる。「美しい」空、「粗末な」食事、「もっともな」値段、「公正な」取引などから察しがつく。特定集団に所属するすべての構成員を評価しようとするときに役立ちそうな特質は一般的に ‘ criteria ’ であり、既に行われた査定に関連する特質からは ‘ standards ’ の存在が窺われる。

彼によれば、一般的にも専門用語としても、両者は置き換えが可能であったり、混同されている例もあるという。とはいえ、精確に比較対照するなら、‘ criterion ’ は「判定のための質的な尺度・観点」であり、‘ standard ’ は狭義にとらえ「判定の合否を分ける境界」となる。

4. 「教育評価」関連用語としての和英充当 - 日本の専門研究者から学ぶ

教育評価の専門研究者によって編纂された事典から「規準」と「基準」の定義については貴重な知見を得た (藤岡秀樹「評価規準と評価基準」辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修『教育評価事典』図書文化社、2006年6月、80頁)。

普通、評価を行うためには、テスト得点や作品を比較したり、照合したりするための何らかの枠組 (判断のよりどころ) が必要である。「評価規準」とか「評価基準」というのはこの照合の枠組 (frame of reference) のことである。

評価の照合の枠組には「何を評価するのか」という質的な判断の根拠と、「どの程度であるか」という量的な判断の根拠の2つが必要である。前者の質的な照合の枠組としては、教育目標を評価目的の文脈に従って具体化した目標や行動を用いるが、これを「評価規準 (criterion)」という。それに対して、後者の量的・尺度的な判定解釈の根拠を「評価基準 (standard)」という。

[中略] 語義としては、評価の枠組として、質的な「評価規準」と量的な「評価基準」の2つを区別しておく必要があるが、実際の評価は両者が一体的になされるので、両者を含む概念として評価規準が用いられることもある。

そして、高浦勝義はその論文において二つの漢字表記の比較対照について立場を明確にしている (高浦勝義「評価規準と評価基準の区別を - 絶対評価のスムーズな展開のために」『教職研修』2005年3月号、126頁)。

私どもは、評価規準 (criterion) は達成目標を指し、一方評価基準 (standard) はその達成目標の学習実現状況を判断する指標を指し、この両者を基本にしてルーブリック (rubric) を作成していこうと考えるところから、両者を表現上においても区別して設定することになっている。すなわち、評価規準は「.....できる」と目標的に表現し、評価基準は「.....書いている」とか「.....している」と事實的・行動的に表現することになっているのである。

ところが、有本昌弘による解説では漢字と英単語の組み合わせは高浦と一致するのに、言葉の解釈がおおむね逆になっている（有本昌弘著『教員評価・人事考課のための授業観察国際指標』学文社、2006年、32-33頁）。

評価規準：クライテリア (criteria) 以前は生徒のパフォーマンスを判定するのに使われたガイドライン、ルール、指標または観点。評価規準は生徒の返答、成果、パフォーマンスによってわれわれが認定することである。全体的、分析的、一般的または特定のでありうる。ルーブリックは評価規準をベースにし、評価規準の意味と使い方を定義している。

評価基準 (standard) 生徒の学習において目標とされるものを指す総括的用語。内容基準、パフォーマンス基準、ベンチマークを含む。

すなわち、有本の「クライテリア」の解釈は、前節で検討した英語 'criteria' の意味に準じ、高浦のそれはどちらかという反している。

和英の組み合わせは、第2節で引用した『広辞苑』の「規準 (criterion)」を範としたものかは定かではないが、『昭和55年改訂 小学校児童 新・指導要録の記入例と用語例』にすでに「評価基準 (standard)」と記されている（熱海則夫・橋本重治・金井達蔵『昭和55年改訂 小学校児童 新・指導要録の記入例と用語例』社団法人日本図書文化協会、昭和55年5月、46頁）。

達成状況の評価のための手続きは分析目標の達成、到達を判定するための具体的な評価基準を明確に設定することである。達成状況の評価の肝心かなめのところはこの基準の設定にある。この評価基準 (standard) と分析された教育目標 (criterion) とはきわめて関連が深いが同じものではない。その目標に対して、児童がどのような学習行動、学習成果を示したら達成できたとするのか、どの程度に達したら+とするのか、またどの程度のもの - とするのか、その判定の基準が確立されていなければ、目標が細目化されていても評価はあいまいなものとなる。

このようにみえてくると、日本の専門研究者の間では、「規準」（いわゆる「のりじゅん」）を 'criterion' の訳語に、「基準」（「もとじゅん」）を 'standard' の訳語に充てることに落ち着いている。しかしながら、英語との組み合わせを考慮に入れて日本語の区別を理解しようすると、困惑してしまう。そのうえ、目標準拠評価の新たな趨勢として「質の評価法」が提唱され、サドラーが当面の論文では 'standard' を従来とは異なる「数量化されない判断基準」という意味で用いると定義した (Sadler, "Specifying and Promulgating Achievement Standards", 1987.)。日本の研究者がそれをカタカナで「スタンダード」と表記し始め専門用語にするに及び、事態はいっそう混沌としてきた（鈴木秀幸「ドメイン準拠評価とスタンダード準拠評価」辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修『教育評価事典』図書文化社、2006年6月、88-89頁）。

5. 和英のねじれ究明 - 'criterion-referenced' (目標準拠) の意識からたどる

相対評価への批判に対処、あるいはそれを補完する方策として絶対評価が提唱された。その普及に伴い、登場したのが、'criterion-referenced assessment' である。この専門用語には「目標に準拠した評価」という和訳が定着していて、類似の表現が四半世紀以上前に刊行された文献にすでにみられる（熱海則夫・橋本重治・金井達蔵『昭和55年改訂 中学校生徒 新・指導要録の記入例と用語例』社団法人日本図書文化協会、昭和55年5月、46頁）。

近年、アメリカを中心に、学力検査に関しては教育目標の到達度を基準にした新しいタイプ

の標準検査も出現しつつある。こうして、学力標準検査に関しては、伝統的な集団基準準拠テスト (norm-referenced test) と目標基準準拠テスト (criterion-referenced test) の2種が出現するに至った。

そもそも ‘ criterion-referenced test ’ は ‘ norm-referenced ’ (被評価者集団の水準・平均に準拠した) との対照として表現された用語なので、「予め作成した評価尺度を適用し、判定を下すため設定された到達目標に照らした」と解釈できる。「目標に準拠した」という慣用句には、特徴を分かりやすく表現するための意識の理は認められる。しかし、この表現において英単語 ‘ criterion ’ 自体が「目標」を直接意味するわけではないことがうかがわれよう。

これを裏付ける手がかりとして、洋書の教育百科事典に ‘ Standard Setting in Criterion-referenced Testing ’ (*The International Encyclopedia of Education*, p.5721.) という見出し語があり、これからは ‘ criterion ’ が作成されていることを前提として ‘ standard ’ が設定されることが知られる。そこで、この表現における二つの英単語の意味を対比させるなら、‘ criterion ’ を「評価尺度」あるいは「評価の観点」とし、‘ standard ’ を「標準」として、「標準」を設定済みの「評価尺度」を広義の「評価基準」と呼ぶことができるのかもしれない。

さらには、第3節で紹介したサドラーの ‘ criterion-referenced testing ’ の ‘ criterion ’ は ‘ standard ’ の誤用」とするとならえ方については、その混同説自体が勘違いにすぎないという見解もみられる (R. K. Hambleton, "Criterion-referenced Measurement", *The International Encyclopedia of Education*, p.1183.)。

‘ criterion-referenced test ’ (目標準拠テスト) という用語における ‘ criterion ’ が ‘ standard ’ あるいは ‘ cutoff score ’ (分割点) をさしている (誤解して) 思い込んでいる向きには、‘ criterion-referenced test ’ に ‘ standard ’ は必要とされないこともあるという事実は意外かもしれない。実際、‘ criterion ’ という言葉はグレイサー (Glaser 1963) により、そして後にポファム他 (Popham and Husek) により、テスト得点が照合される内容領域・行動領域をさして用いられた。

なお、目標 (objectives) と ‘ criterion ’ の関係についての考察は、先に引用したサドラー論文の続きを読むと、参考になろう (Sadler, 1987, pp.194-195.)。

目標 (objectives) は当然 ‘ criteria ’ の主なよりどころとしての役割を担うという共通理解がある。とはいえ、目標と ‘ criteria ’ とが相剋するはずはないけれども、両者が果たす機能の違いは顕著であり、構造的にも異質である。目標は未来指向である。すなわち、これから起こそうと意図していることを明らかにし、学習体験の実現を目指す企画の担い手として有能である。他方、評価 (assessment) は、回顧指向である。すでに行われたことを省察する。評価と ‘ criteria ’ とが臨機応変に連動すれば、与えられた状況の下で学習者の成果・実績の計量器である ‘ criteria ’ の的確性が増す。その結果として ‘ criteria ’ はたちまちためらうことなく、評価の特定課題と評価要件に変貌する (Sadler 1985)。しかしながら、それらを当初の目標に結びつくようにするには、教育の成果について精密な予測を把握することが要求される。さらに、目標が表現される言葉は、途切れず連綿とした質的基盤という概念になじむようにはならない。実際、目標が具体的なものなら、その典型として修得を意味する表現 (mastery terms) で示される。学習すれば「これができるようになるであろう」「あれができるようになるであろう」というふうになる。その表現は、(むろん、幾つかの到達度段階に分ける方法も認められるけれども) 原則として合否のいずれかに二分することを提示することの方が多い。そ

の特徴として代償や相殺が起きても不思議ではないことを示唆するのはむしろまれである。達成できた目標の数に応じて成績に段階をつける（あるいは逆に、達成できなかった目標の数に従って不合格の等級をつける）とすれば、評価の審査が分担されたり、項目別にチェックリストが活用されたりする。

つまり、‘ criterion ’ は「目標」とはなじまない。むしろ、‘ standard ’ の方が「目標」となりうるのである。漢字表記で「目標」と相容れるのがどちらか二者択一を迫られれば、「規準」の方であろう。

6. むすび

英語の識別に表意文字である漢字を用いるには、まず、英語の語義を精確にとらえること、漢字の意味を深く理解することが先決であることは論を待たない。「規準」と「基準」、「criterion」と‘ standard ’ は共に、一般的には対照的に使われているのではない。語義からみると、「基準」は「規準」を包摂しており、‘ standard ’ の多様な意味によって ‘ criterion ’ はカバーされるといえる。すなわち、「基準」は ‘ standard ’ および ‘ criterion ’ 双方の訳語となりうるし、‘ standard ’ は「基準」と「規準」のいずれもの訳語となりうるであろう。また、‘ standard ’ に対応する日本語は豊富で「基準」「規準」だけでなく、「標準」「水準」「規格」などとも訳され、これらの類語を連想させるのである。

このようにみると、漢字の純朴な意味と英語の語義の整合性からは、「規準 = criterion」に対する「基準 = standard」の充てがいに再考の余地がないとはいえない。専門用語として ‘ criterion ’ に「規準」を充てることにしたまではよいとしても、用いなかった片方を拾い組ませたとすれば、問題が起きる。私見では、多様な「基準」の意味のうち、「規準」以外の意味のひとつとして ‘ criterion ’ が位置し、‘ standard ’ の多様な意味のうち、‘ criterion ’ 以外の意味のひとつとして「規準」が位置しているように思われる。

なお、冒頭で触れた「評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（小学校）」（平成14年2月）にはいずれの英単語も登場しない。それには、文部省『小学校教育課程一般指導資料』（平成5年9月）より抜粋「評価規準について解説した部分」が掲載されている。

「評価規準」という用語については、……新しい学力観に立って子供たちが自ら獲得し身に付けた資質や能力の質的な面、すなわち、学習指導要領の目標に基づく幅のある資質や能力の育成の実現状況の評価を目指すという意味から用いたものです。

この「評価規準」は行政用語として「手本」「模範」という意味合いで特定的に使われているのであり、「評価基準」と識別対照させる意図や、英語の ‘ criterion ’ に充当される専門用語としての機能は託されていないと考えられる。

いずれにしても、英語の ‘ criterion ’ と ‘ standard ’ とを識別する目的であれば、紛らわしい「規準」および「基準」にこだわらず、「標準」や「水準」(level)、また「尺度」(rating scale)などの豊かな日本語表現を勘案することもひとつの方法ではないだろうか。比較対照しながら、日本語で最も近い単語をやや強引に探すと、‘ criterion ’ は「尺度」、‘ standard ’ は「標準」かもしれない。それでも結局、拙訳では日本語への言い換えに踏み切れず、「クライテリオン」「スタンダード」のカタカナ表記にとどめた。

以前は「評価規準：クライテリア」として解説していた有本（第4節で引用）が、最近刊行され

た監訳書の「あとがき」においては「クライテリア」を特筆すべき訳語とし、見直している(OECD 教育研究革新センター編著・有本昌弘監訳『形成的アセスメントと学力 - 人格形成のための対話型学習をめざして』明石書店、2008年3月、276-277頁)。

複数形でクライテリア (criteria) として多く使われ、「判断材料・判断手段」を指すと考えられる。判断材料については、尺度や物差しあるいは人格的な側面での次元またはカテゴリーや方針と言い換えられるかもしれない。[中略]

「クライテリア」の訳語を「規準」としてしまうと、人によっては、尺度というよりは、行動の手本となる規範性のニュアンスにとらえ、金科玉条、社会の掟、鉄の掟のように受けとってしまうため、せっかく作成したものが陳腐化してしまう恐れがないわけではない。

このように述べていることから、専門用語を英語から日本語に翻訳することの難しさを再認識させられるのである。

【参考文献・資料】

"Criterion-referenced Measurement", *The International Encyclopedia of Education*, second edition, Pergamon, pp.1183-1189.

"Standard Setting in Criterion-referenced Testing", *The International Encyclopedia of Education*, second edition, Pergamon, pp.5721-5726.

D. Royce Sadler : "The Origins and Functions of Evaluative Criteria", *Educational Theory*, Summer 1985, Vol.35, No.3, the Board of Trustees of the University of Illinois.

D. Royce Sadler : "Specifying and Promulgating Achievement Standards", *Oxford Review of Education*, Vol.13, No.2, 1987, pp.191-209.

Teachers College, Columbia University : *Early Childhood Environment Rating Scale*, revised edition, Teachers College Press, 1998, New York.

辰野千壽・石田恒好・北尾倫彦監修『教育評価事典』図書文化社、2006年6月。

東洋・梅本堯夫・芝祐順・梶田叡一編『現代教育評価事典』金子書房、1988年

三宅和夫・北尾倫彦・小嶋秀夫編『教育心理学小辞典』有斐閣、1991年。

有本昌弘著『教員評価・人事考課のための授業観察国際指標』学文社、32 - 33頁。

有本昌弘「総合的学習に向けたアセスメント(評価)の整理」『総合学習17 特集：総合的学習に向けた評価の工夫』黎明書房、2003年1月30日、14 - 17頁。

OECD 教育研究革新センター編著・有本昌弘監訳『形成的アセスメントと学力 - 人格形成のための対話型学習をめざして』明石書店、2008年3月、276 - 277頁。

高浦勝義「総合的な学習の評価規準と評価基準の設定」『教職研修』2005年1月号、123 - 126頁。」

高浦勝義「評価規準と評価基準の区別を - 絶対評価のスムーズな展開のために」『教職研修』2005年3月号、124 - 127頁。

千々布敏弥「これからの評価をどう構想すべきか - 評価規準と評価基準」『指導と評価』2004年12月号、41 - 44頁。

長崎栄三「目標に準拠した評価を生かした指導の改善」『中等教育資料』平成17年4月号、20 - 25頁。